
FUCK'N BRAT

蛇豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FUCK・N B R A T

【Nコード】

N 9 8 4 9 Y

【作者名】

蛇豆

【あらすじ】

とあるヤクザの若頭、土田寛平が頭を撃ち抜かれた。意識を失い、目覚めた所は地獄の底辺、「辺獄」。どうやらここで十人の人間を殺さないと現世へ戻れないらしい。だが、その前に立ちはだかるのは……毒殺貴女ブランビリエ公爵夫人、人食いスウィーニー・トッド、米国史上最悪の殺人鬼アルバート・フィッシュetc……。歴史に残る世界の殺人鬼達が次々と襲いかかる！！土田と共に立ち向かうは、英国連続殺人犯、切り裂きジャック（エロ美シヨタ注意）、狂乱乱射ブロンド美女ブレンダ・スペンサー、墓場のキチガイ、エ

ド・ゲイン etc……。

敵も味方も主人公もみんなチートです。そして、主人公以外、全員実在した人物でございます。自称世界一罰当たりな異世界転生モノです。

異世界転生極悪バイオレンスファンタジーここに開幕！！

いーあどーじやあああああ！？ 1

「らあああああ！！」

前田組若頭、土田寛平は日本刀を振るった。
すると、前にいた男の頭が吹っ飛んだ。

深夜の大阪市で前田組と相田組との抗争が勃発していた。

前田組若頭、土田寛平が部下四十人を率いて、相田組三十人を討
つ。

だが、前田組は劣勢にあった。

相田組の連中が手榴弾を装備していたのだ。

土田のすぐ横で爆発音が鳴り響いた。

振り向くと、組の者がまた一人犠牲になっていた。

下半身を丸ごと吹き飛ばされ、血溜まりの中で無意味に両手をじ
たばたさせていた。

既に半数以上が殺されている。

土田は叫んだ。

手榴弾が迫る。腕で跳ね除けると、すぐ先の空中で爆破した。

粉塵の中でまた斬る。

最寄りの男の胴を唐竹割りした。

だがその直後、発砲音が。

ここはどこじゃあああああ!？ 2

すぐ右横にいた男が拳銃を構えていた。

銃口から射出された弾丸が土田の頭を貫いた。

「はぐあ……!」

土田の視界が瞬間、赤に染まった後、黒に埋め尽くされた。
崩れ落ちる刹那、

兄貴!! 兄貴!!

と声がしたが、口を開く事ができなかった。

土田は意識を失った。

それからいくら時経っただろうか。

目が醒めた。

起き上がると、辺りに広がる余りの光景に愕然とした。

見知らぬ樹海のご真ん中で、土田は目覚めたのだ。

思わず、頭を抱えた。

なんでや、

なんでワイはこんな所におんねん?!

突然、焦燥に駆られた。

「いゝあどこじゃあああああ！？」 3

「なんじゃあ、ここはああああああああ！！」

土田は叫んだ。腰に提げた日本刀が揺れた。

何処からも誰からも返事はない。

――糞、ここあ何処じゃあ？

記憶を探っても、何も手掛かりは無かった。どうして此処にいるのかも、此処が何処なのかも全くわからない。

混乱したが、暫くすると整理がついた。

「……進もか……」

かったるく呟いて、土田は歩きだした。

土田は取りあえず、この樹海を抜ける事にした。

一歩踏み出す毎に粘り気のある土が靴に張り付く。

少し進むと、もしかしたら、俺は他の組の奴等に埋められかけたのではないか、と思いついたがすぐに撤回した。

理由のない、根拠のない全く机上の空論だった。

いーあーどこじゃああああ！？ 4

歩いて三時間。

一向に樹海の終わりは見当たらない。むしろ深部に来ているのではないだろうか。さらに、この上無く腹が減った。

「あー牛丼でも喰いたいのお…」

土田は前田組の若頭であり、刀捌きも良いが、典型的なメタボ体型である。

何か特別なこともなく、ただ単純に大飯喰らいだという事に由来する。

「……飯になるもん無いやろか…？」

辺りを見回してみる。

飛び回るのは、バッタや蛙、蠅くらいのものしかない。

仕方無いのでバッタを捕まえてみた。

体長二十センチ程の赤い体躯。土田の手の中でがむしゃらに抵抗する。

……いただけない。

放り捨てた。

懷石料理などで舌が肥えてしまった土田があんなもの生で食べられるわけがなかった。

腹が減ったのを我慢して、前に進む。

「いーあーどーじやあああああー!?」 5

すると、突如女の叫び声が。

甲高い声で、助けて、とはっきりと聞こえた。

「何や!?!」土田は慌ててその方向へ向かった。

金髪の二十歳程の女が悲鳴を上げながら走っていた。

その後ろには、黒いローブを着た、壮年の男。

この男に女は追いかけていた。

これを三十メートル離れたところで目視で確認した土田。

「エライシャバイ事やつとんのお……」苔に覆われた岩の陰で刀の柄に手を掛ける。「……アホは殺さなな」

岩陰から岩陰へと次ぎ、移動する。土田は見えてくれとは裏腹に、とても俊敏だ。草むらを這う豹のように、静かに素早く獲物に近づく。

そして、男との距離が五メートルにまで詰まった時、土田は飛び上がった。

「何さらしとんじゃ!?!ワレエエエエ!?!」

一瞬で相手の懐に潜り、刀を振った。

男は成す術なく、首を切り落とされた。

泣き別れした胴から勢い良く吹き出す血飛沫が大木の幹に降り懸かる。

男の体が崩れ落ちた。

「いーあどこじゃあああああ!？」 6

次の瞬間、泣き喚いていた女が突如として懷からピストルを取り出し、銃口をこちらに向けてきた。

「こっちに来るなあああ、クソ死達^{バルバ}ア!!」

打ち震えながら、嗚咽を漏らしながら、叫ぶ。相当に息が荒い。眼の瞳孔が完全に開いていた。明らかに殺意のある眼だった。罵倒が続く。

だが、次第に声は弱々しくなっていき、瞳から大粒の涙を漏らし始めた。

「逃がしてよ……お願い……ここで死ぬなんて私……」とうとう、女はひざまずいてしまった。

「ーなんじゃあ、コレ？」

土田には状況が全く読めなかった。

助けた少女がいきなり銃口を向け、泣き始めたのだ。

さあ、これはどう取ったらしい？

土田には思いつかなかった。

取り敢えず、慰めてやることにした。

しゃがみ、女の頭を撫でる。

「：ワシやあヌシン命なんぞ取りやあせんよ。安心せいや」
そうしてやると、女は徐々に落ち着きを取り戻していった。

「いーあどーじやあああああ!？」 7

「貴方……死達^{バルバ}じゃないの……?」

「なんや? 『ぼるば』 っちゅーんわ。ワシあ知らん」

「……分かったわ、貴方、この世界に来て間も無いでしょ?」

「何でや? 『この世界』 言うんわ……?」

「ここあ異世界やっちゅーとんかいの……?」

土田は頷くと、女は立ち上がった。

「こっちに来て」

手を引っ張られた。土田はそれに従い、樹海の茂みの中へ連れていかれた。

やがて、洞穴に着いた。

崖の絶壁の麓に出来た小さな洞窟だった。洞窟内から光が漏れている。

「入って」

土田は言葉通り、洞穴の中に潜り込んだ。メタボの土田にとっては狭かった。まだ奥に続いているようなので、どうにかして突き進む。

すると、突然大きな空間が現れた。

少々湿っぽいが、室温が丁度良く、人が快適に暮らせるだろう空間だった。

真ん中には簡素な木製机があり、椅子がその周りを囲んでいる。机の上のランタンの光が、汚れた食器などの食事の痕跡を照らし出した。

「やあやあ、ブレンダ。お客さん？」

ランタンの光が届かない闇の奥から、この場に似つかわしくない、スーツ姿の少年が現れた。

十一か二歳程の少年だった。

鬱陶しい程伸ばされた艶やかな前髪の間から、狂気をはらんだ鋭く冷たい眼を輝かせる。シルクハットを被り、持っているステッキにもたれ掛かるようにして立つ。英国紳士か何かか？長い前髪と比例して後ろ髪も相当に長かったが、青く細長い糸である程度束ねられていた。

気付くと、土田の後ろに女が立っていた。

成る程、この女の名はブレンダ、か。

ブレンダは少年に言った。

「そう。お客さん」

すると、少年は不気味に艶笑した。「アッハハ♪んじゃ、お兄さん。そこに座ってよ」

「いーあーどーじやあーあーあーあー!？」 9

……ヤバイトコにおるんやないかいのお……？

土田は椅子に腰掛けたが、鞆に手を掛けた。いつ襲いかかられても対応できるように、だ。

それを見た少年はまた笑った。「お兄さん、僕達は君を殺そうなんてこれっぽっちも思っていないよ」そう言って少年も向かいの席に座る。

「まずは自己紹介から……んじゃ君からね、お兄さん」

どうも掴めんガキやの……

「……土田寛平や」

「ふうん、で、現世で何人殺したの？」

「……!!」

なんや、このガキ。なんでワシが人殺しや分かった……？
んで……「現世」ってんわ……？

暫くの沈黙の後、土田が

「……なんや、貴様ポリか？」と聞き返した。

すると少年は「へえ、何にも知らないんだね」とおどけた調子で
言ってから

「……僕の名前はね……通称だけど、ジャック。切り裂きジャック。分かるかい？」

と続けた。

いゝあどこじゃあああああ!？ 10

土田は今まで三十人以上の命を奪ってきた。他の組との抗争に次ぐ抗争で今の「若頭」という地位にいるのだが……。
今、そんな昔話をする場合ではない。

土田の目の前にいる少年が、自分は切り裂きジャックだ、と言い放ったのだ。

が、土田は即刻切り返した。

「貴様、ヤクかなんかで頭イかれてしもとんかい？アホか。切り裂きジャックなんぞ遠い昔におらんたとるわ。なに戯言ぬかしとんじゃ」

「だあかあら、今、君の目の前にいるのが切りさ……」

「じゃかましいわ、おどれェ!!」

激昂して立ち上がる土田。

の後頭部に固い物が押し当てられた。

「静かにして。洞窟はとも響くの。五月蠅いの嫌いな」
ブレンダのライフルの銃口だった。

「……チッ。もといのお……」生殺与奪の権を握られた土田。席に戻った。

「君って元気いいねえ、アハハ♪」ジャックが艶やかに笑った。

「いゝあどこじゃあああああ!？」 12

「例えるなら…牢屋で扱いきれなくなった罪人を拘束する……禁固室みたいなトコなんだよ、ここは」

「ほうか。ワシらはここから永遠出られへんっちゅーこっちな？」

「いやあ、そういうワケじゃあないんだよ」またジャックは続けた。

辺獄。

地獄の底辺に位置する場。

陸地は直径70キロの円上の孤島になっており、樹海、砂漠、草原と様々な地形が存在する。それを囲む海の構成物質は主に硫酸。沿岸部では気が狂うような異臭がする。

そこで死ぬと、体が魂の存在ごと抹消され、永久無限に『無』となる。

物理的な脱出方法はないが、そこで人間を十人殺すと辺獄を統治する神によって現世へ蘇る事ができるらしい。その理由については諸説あるが、未だ不明である。

「……ちなみに僕は七人殺したよ」ジャックは自慢気に話を締めくくった。

土田は現在一人。

ブレンダを助けたので一人だ。

「私は四人」そのブレンダが言った。「二年掛かってようやくよ」
「待てや、二年で四人かい。遅すぎるんやないかいのお」土田は挑発的に笑った。「ワシやここん来て間もなしに一人殺ったわいのオ？ええ？」

「……んじゃ、殺してきてみたら？今すぐに」

「何や、そん目は。やったらうやないかい。十でも百でも殺つたる。まず、ここで……二人やな」

ブレンダがライフルを構えた。土田はとっさに立ち上がると、その銃口を刀で払い除け、彼女の懷の中に入った。

だが、土田の動きはそこで止まった。

ジャックが土田の喉元にメスを突きつけたのだ。目にも留まらぬ早さだった。

「僕のセフレに一体何しようとしてるんだい？お兄さん」

メスのほんの切っ先が喉にめり込む。雀の涙ほどの血液の滴がそこから流れ落ちた。

「あのねえ、聞いて。聞かないと今にも先にも死ぬことになるよ？」

狩りじゃあああああ！！ 1

土田は二人を振り切って、洞穴から出た。

勿論、話の続きは聞いていない。

土田は早く現世に戻りたかった。

近々に組長の座を争奪する抗争があるのを思い出したのだ。

今すぐ十人殺さないといけない理由が出来た。グズグズしている暇はない。

獲物を見つけるため樹海を走る。執拗に襲う空腹感が邪魔だった。生えていた草から適当に葉を千切って口の中に詰め込んだ。苦かったが、我慢して飲み込んだ。これを四度繰り返した。

漆を塗ったような藍の着物がズタボロに汚れていく。草履が泥まみれになっていく。

走る度に足元の泥が跳ねた。

よう湿ったところに入ってしもたな、と後悔する。

雨が降ってきた。土砂降りの冷たい雨だ。

鬱蒼な樹海に鬱陶しい雨、土田は憂さ晴らしに叫んだ。

口の中に雨水が入ってきた。乾いた舌に染み込んで案外旨かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849y/>

FUCK'N BRAT

2011年12月24日00時48分発行